

第十四回ハイクアート賞発表！

俳句美術館・第十四回「ハイクアート賞」に多数のご応募をいただき有難うございました。『俳句部門』では、八木健の制作したアート九点に俳句をつけていただきました。『ハイクアート部門』では、アートと俳句の両方をご自身で作っていただいてご応募いただきました。応募総数は、俳句部門が一八七点、ハイクアート部門が七六点で、七歳から八十六歳の方がご応募くださいました。

審査の結果、以下の通り、大賞、選者特選、秀逸、入選の各賞を決定致しました。

俳句部門

大賞

村ひとつ獣に返し夜半の秋

茨城県 舘健一郎



特選

小西昭夫賞

ミニトマト小さな秘密子にもあり

愛媛県 秋山豊美



【講評】小さな秘密が子にもありということ
は、大人（親）はもっと大きな秘密を持っているのだろう。秘密がその人の力の源泉かもしれない。

中山和子賞

花は葉に少年ある日「俺」と言う

愛媛県 秋山豊美



【講評】季語の「花は葉に」は、時間の経過がある言葉だが、「少年ある日」とうまく呼応している。少年の成長に喜びと戸惑いのまざった作者の思いが伝わる。

松本勇二賞

生き延びて桜に少し腹を立て

石川県 豊代恵子

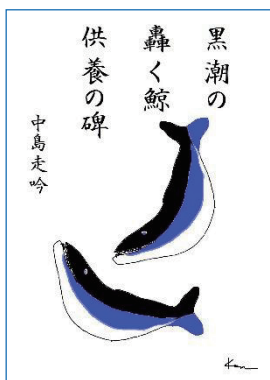


【講評】病氣や禍からうまく生き延びた作者が桜を感慨深げに眺めるのかと思いきや、腹を立てるという。毎年変わることなく美しく咲く桜に少し嫉妬した作者か。

吉原文音賞

黒潮の轟く鯨供養の碑

和歌山県 中島走吟



【講評】眼前には太平洋が広がる。耳にはダイナミックな波が碎ける音。「黒潮」の轟きが、鯨の魂を故郷の海へと誘っているかのようだ。「鯨供養」という言葉に温かみがある。

八木健賞

国家論ビール二杯で国背負う

沖縄県 沖杣杷夫



【講評】政治が悪い。物価が高い。給与が税金に追い付かない。部長は社長のご機嫌を伺い、部下は部下で自分勝手。俺たちが立ち上がらないと国は変わらない。さあ飲もう。

秀逸

誰ももう還らぬ家や藤の花

北海道 鎌田 誠



【講評】「誰ももう還らぬ」まではよく詠まれる風景である。「藤の花」で、この句は断然立ち上がってくる。藤の花の生命力に対して、この家の末路に溜息がでる（中山）。過疎化の問題が句の背景に感じられる。廃れ、滅びゆくものに切なさを感じるとともに、家を呑み込む自然の勢いに目を瞠る作者の驚きを感じられ、共感を覚える。滅びと盛りの対比が切迫感をもって詠まれている（吉原）。

立ち合ひの如くゴツンとピアジョッキ

兵庫県 尚山和桜



【講評】みなさん、ビールは注がれましたね。お立ち下さい。カンパイの前にひと言、部長からご挨拶です。手短にお願います。さあ、カンパイは、ジョッキが割れない程度にお立

夜しずか死者の分まで老いてゆく

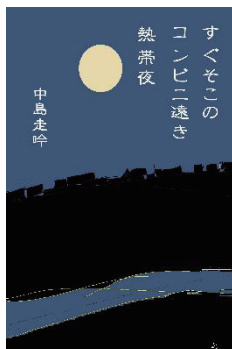
石川県 豊代恵子



【講評】イラストが夜の静かさを伝えてくれる。しんしんと時間がたち、自分も年老いてゆく。死者は生者の記憶の中で生きているのだから、生者が老いれば、その分死者も老いるのである（小西）。今は亡き人を思いながら、その人の分まで生きてきた。だからこそ、一緒に生きた分だけ老いるのである（八木）。

すぐそのコンビニ遠き熱帯夜

和歌山県 中島走吟



【講評】今年の夏も暑かった。クーラーの効いていない道路では、わずかな距離でも日中は危険。夜になってやっと外出するが、歩き慣れたいつもの道が長く感じられる（八木）。

入選

アート① 花



原産はみんな地球よ籠の花
花の鉢大鉢中鉢小鉢かな

桜井美千
沖枇杷夫

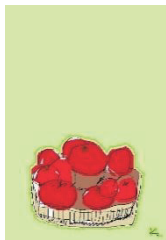
アート② 花火



ゴメンネの一言言えて庭花火
我が恋を線香花火と言うなかれ
手花火や子なし夫婦の三十年
横顔の君だけ見てた花火の夜

船橋昭彦
沖枇杷夫
船橋昭彦
近藤國法

アート③ トマト



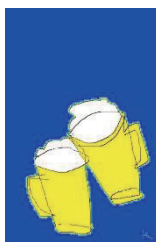
朝採れのトマト口中大地の香
相性を褒め合ふ鯖缶赤茄子
潜り浮きたらひに遊ぶトマトかな

山西哲子
中野サヨ子
月城花風

今日生きて明日ある命トマト食ふ

館健一郎

アート④ ビール



女子会の食べて喋って大ジョッキ
一敗は一敗としてビールかな
念のために生きているのさ生ビール
暑気払ジョッキを当てるそこかしこ
注がれゆくビールと嫉妬成功者

西野周次
浜田邦夫
船橋昭彦
村上ヤチ代
月城花風

アート⑤ 紅葉



富士写す水面の精緻冬紅葉
紅葉且つ散るわたしには君がいる
散る紅葉川面がそつと抱き寄せて
初紅葉老舗恒例きもの展

西野周次
清水星凜
稲葉純子
近藤國法

アート⑥ 読む



の色は捨て難い希望の色かもしれない(吉原)。力強い写真である。瓶のラムネは選者の時代では郷愁のある飲み物だが、瓶の造形がいい。分厚い口当たりもいい。あの濁った緑色の瓶を透かして昭和の時代が見えるだろうか(中山)。

書き遣す妻のひらがな螢の夜

大西陽子

「風立ちぬ」読みたくなりぬ辰雄の忌 西野周次

アート⑦ すべる

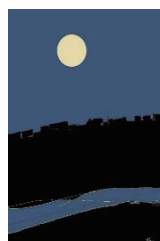


円舞に輪舞四分間のスケーター
氷上の軌跡は奇跡にくりくりゆうペア

稲葉純子

日根野聖子

アート⑧ 夜



集落の夜空震はす雨太鼓
わが暮し月に照らされゐたりけり

近藤國法
狭霧 渡

アート⑨ くじら



蛸蜷やなめくじらとは大層な
海原にザトウクジラの愛の歌

尚山和桜
秀爺

ハイクアート部門

大賞

ラムネ瓶透かし覗けば世の歪み

兵庫県 多田恵太(写真)



【講評】

ラムネ瓶は不思議な形である。炭酸ガスの圧力でビー玉を押し付けて密閉している。強情な奴だ。世の中を睨み続けて何十年。人間の不条理を知り尽くしている筈だ。ラムネ瓶にその思いを聞いてみたいね(八木)。ラムネ瓶の輝きのとらえかたが見事。黄色のバックもエネルギーだ。まさに冴えた写真。句は透かして覗いたものが過去や青春ではなく、世の歪みであるというところに鮮度があつた(松本)。光溢れる背景に複雑な歪みを宿すラムネ瓶。「世の歪み」が表された写真である。作者には古き佳き時代があり、現代の危険の溢れた社会への危惧が内包されているようにも感じられ共感できる。背景

特選

小西昭夫賞

仕送りに母の目うるむ蜜りんご

兵庫県 多田太志(水彩画)



【講評】

仕送りの高度成長の始まるころの日本では、子どもから親に当たり前のように行われていた。ところが、今は働き始めた子ども

中山和子賞

派出所は招き猫のみ春うらら

大阪府 藤原 朗(木版画)



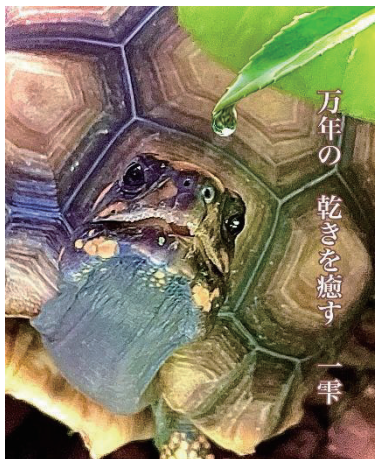
【講評】

この招き猫とても可愛い。猫好きにはたまらない。木版画がいい味を出している。句は、無人の派出所を詠んでいるのだが、こんな派出所、地方にはありそうで実感がある。そこがいい。巡回に出掛けていらっしゃるおまわりさん。どこかでお茶でも招ばれているのでしょうか。春うららの季語がとても効いている。

松本勇二賞

万年の乾きを癒す一雫

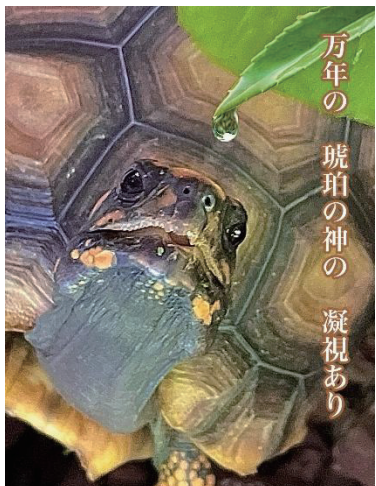
兵庫県 多田太志（写真）



吉原文音賞

万年の琥珀の神の凝視あり

兵庫県 多田太志（写真）



八木健賞

太鼓の音空を舞いたい祭獅子

愛媛県 松下陽子（写真）



【講評】

「鶴は千年。亀は万年」という故事を踏まえての作品。亀の表情がいい。髭のように見える頸筋もいい。句は、膨大な年月と、雫ひとつという大きく隔たる対象の提示で成り立った。

【講評】

葉先の雫を凝視する亀を捉えた見事な写真。亀の甲羅が琥珀色であることから、「琥珀の神」と亀に神格を与えた発想と措辞が光る。葉の緑が美しく、この雫は聖なる水の一滴のように感じられ、神秘的な光を宿しているかのようだ。偶然の出会いを見事なアングルで捉え、一行詩にされていることに惹かれた。

【講評】

祭獅子を擬人化して楽しい句となった。獅子の使い手さんは獅子になりきった動きをするが、見ている方も、まるで生きている獅子のように思えてくる。太古の昔からあった太鼓の音に、獅子の遺伝子が反応しているかのようだ。軽やかな身のこなしに、ふっと空に舞い上がれそうなほどである。

秀逸

顔よりも大きな口で生き残る

神奈川県 八十日目（写真）



【講評】

今回の応募に口を開けた巣燕の写真は他にもあったが、俳句とのコラボということではこの作品が出色。「顔よりも大きな口で生き残る」という句はこの写真でなければ様々な読みを誘うが、この写真が巣燕の生き残りであることを指示する（小西）。本当に顔中が口ですね。この角度の写真って撮るの難しいですよ。下五の「生き残る」がいい。子燕は三羽か四羽か。ホラ頑張って鳴きなさい（中山）。子育て中の燕の巣はにぎやかだ。その様子が聞こえてくるようだ。句は「生き残る」が自然の厳しさを思わせてリアル。下五で大きく展開させる巧みな一句（松本）。

春霖におしくらまんじゅう群雀

兵庫県 多田太志（写真）



【講評】

春の長雨にさらされながらじつと耐えている雀たちがけなげに迫ってくる。広重の「大はしあたけの夕立」の絵にも負けない雨の筋がみごと。「春霖」という語が句を引き上げてくれた（松本）。雀たちは交互に右向き、左向きに並んでいるが、一番手前の雀だけ正面を向いて何か言いたそうにも、無然としているようにも見える。その表情が面白い。「おしくらまんじゅう」をしながら耐えている雀たちに容赦なく雨の糸が降る（吉原）。

暮色の庭に零る花ミモザ

東京都 清水ぼっぱ（切り絵）



【講評】

ミモザの花の切り絵。上下が対になってい

秋天に家族の絆パスひとつ

岡山県 貞住昌彦（写真）



【講評】

面白い写真。パスして家族でつないでいる作物は何だろう。瓜のようにも見えるし、ひよっとしたら楕円形の西瓜かもしれない。パスをつなぐ女性の赤い前垂れと最後にパスを受け取る女性の青い前垂れがいいアクセントになっている。もちろん、空中にある作物が一番の魅力である（小西）。

入選

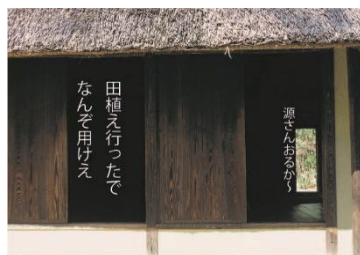
春近し熊の喉に詰まる闇

北海道 大嶺さつき (写真)



源さんおるかゝ田植え行つたでなんぞ用けえ

岡山県 貞住昌彦 (写真)



夏の朝昨夜のひみつ知らぬふり

千葉県 森アツシ (水彩・マーカー)



好きと言ひ張つてパセリを食う弟

東京都 前川愛乃華 (着物古布)



ガジユマルの木下闇より招べるこへ

鹿児島県 金羽生 (写真)



初夏光ルアー迷へど胸たのし

宮崎県 池田虎吉 (水墨・illustrator)



稻雀ちよつとついはみ秋の空

兵庫県 多田太志 (写真)



菜の花の花瓶に溢るる誕生日

愛知県 神本浩子 (写真)



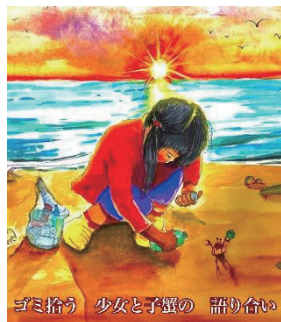
逝く径に咲いてください彼岸花

愛媛県 松下陽子 (写真)



ゴミ拾う少女と子蟹の語り合い

兵庫県 多田太志 (水彩)



陽だまりの主と化して悟り顔

兵庫県 多田憲太 (鉛筆・色鉛筆)



審査員紹介



小西昭夫

子規新報編集長、愛媛新聞俳壇選者。句集『花綵列島』『ペリカンと駱駝』『小西昭夫句集』『チンピラ』、著書『金曜日の朝』『虚子百句』他。



中山和子

「初蝶」主宰。句集『分別顔』『迷路』、エッセイ『季語の思い出』他。



松本勇二

愛媛県俳句協会会長、「虎杖」代表。句集『直瀬』『風の民』。

第15回ハイクアート賞募集要項

1. 俳句部門…八木健のアートに俳句をつけてください。
2. ハイクアート部門…ご自身のアートに俳句をつけて、お送り下さい。

募集期間：令和9年4月1日～令和9年7月31日 必着

審査員：上田日差し 小西昭夫 松本勇二

吉原文音 八木 健

結果発表：令和9年10月下旬予定。

主催：俳句美術館（問合せ 090-8287-1390）

* 作品はオリジナルのもので未発表に限る。

* 募集内容の詳細は、俳句美術館ホームページに、令和9年3月頃掲載予定。「俳句美術館」で検索可。

<http://www.haikubijutsukan.com>

* 応募作品の著作権は主催者に帰属。

吉原文音



「太陽」主宰。句集『風の翼』『モーツァルトを聴くやうに』『海を詩に』、評伝『中城ふみ子―マリ・ブルーの青春』『吉原文音のあらかると』。



八木 健

俳句美術館館長、滑稽俳句協会会長、「八木健の俳句遊遊」番組主宰。句集『ゆず』『逃水』『滑稽俳句集』『平成の滑稽俳句』、著書『俳句・人生でいちばんいい句が詠める本』他。